

Alumni and Alumnae News No.6

令和7年3月に、第VI期 教職実践高度化専攻（教職大学院）院生が2年間の学びを終え、教職修士（専門職）の学位記を手し、それぞれの道に巣立っていきました。教職大学院では、学校教育に関わる専門性と実践力を持ち、学校教育における組織的取組や授業力向上、特別支援教育の取組をリードし、多様な教育課題に応えていくことのできる資質・能力を備えた人材を育成しています。第VI期のそれぞれの修了院生は、高知県の教育課題解決に向け、自ら設定した研究課題に沿った研究活動に邁進し、大きな成果を残すことができました。

学校マネジメントコースの**赤崎浩平さん**は「不登校の未然防止に向けた協働体制の充実—ピア・サポートに焦点を当てて—」、**大勝由美さん**は「協働意識を高めるチーム学校づくりの改善方策—学び合い高め合うメンター制の構築—」、**川村浩二さん**は「学校組織マネジメント力を発揮する協働体制づくり—組織力を高めるミドルリーダーの育成について—」について研究し、学校の教育活動を効果的にマネジメントすることを通して、生徒指導上の課題解決をはじめとする子どもを取り巻く校内の組織改革や活性化についての学びを深めました。

授業実践コースの**田内南央さん**は「考察・構想・表現する歴史的分野の授業の研究」、**樋口桃子さん**は「複式学級における協働的な学びの促進を図るICT活用」、**安田直子さん**は「道徳的判断力を高める話し合い活動の在り方」について研鑽を重ね、授業実践の高度化を図り、それぞれの授業力を高めることで質の高い学びにつなげました。

特別支援教育コースの**井上郁子さん**は「英語学習に困難のある生徒への効果的な支援方法の研究」、**小野哲史さん**は「高校通級における進路支援—職業準備制への獲得に向けて—」、**杉元健太さん**は「肢体不自由特有の学びにくさの改善に向けた指導・支援—ICT活用を中心においた個別最適な学びの実践—」、**山沖智子さん**は「教員の気づきから生徒の特別な支援へ繋げる体制の充実」、**安岡知美さん**は「知的障害特別支援学校における金融教育」について研究し、特別支援教育を通して、個別支援だけでなく社会の中で生きていくための力を付けるための効果的な方法を探りました。

それぞれの研究の成果は、各学会発表や学術論文として公表されています。修了院生は、4月から学校や教育委員会で勤務し、これまで学んだ理論や実践力を生かして活躍しています。

このあと、各修了院生が、本教職大学院で学んだ「理論と実践の融合」から自己成長を遂げ、高知県の教育現場の中核的存在・即戦力として教育現場で努力を重ねながら、多くの教職員への波及効果を目指して日々実践している様子や、日々奮闘している様子を紹介します。

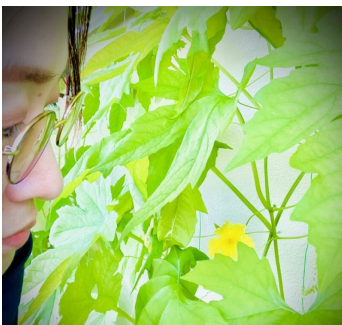
【学校マネジメントコース】

赤崎 浩平さん「支え合う学級集団づくりを目指して日々奮闘中！」安芸市立安芸中学校



4月より在籍校にもどり、1年生の学年主任と学級担任、さらに生徒指導主事をしています。学校では、担当学年の生徒を対象にしたコミュニケーションスキル獲得のための講座を実施や、主観的健康観アンケート調査を基にした面談を行い、教職大学院での学びを生かし、支え合う学級集団づくりを目指して日々生徒たちの声に耳を傾けております。この取組は授業や学校行事との兼ね合いが難しく、なかなか思うような集団づくりまでは至っていませんが、学校の実態、生徒の実態に応じたコミュニケーションスキル獲得の講座を効果的に実施し、ピア・サポートの理念を学級・学年に根付かせていきたいと思います。

大勝 由美さん「研究の成果等を生かせるように日々努力しています」高知市立江陽小学校



大学院では「協働意識を高めるチーム学校づくりの改善方策—学び合い高め合うメンター制の構築—」をテーマに研究を行い、学校内においてメンティにとって悩みの解決や学びの促進に繋がり、メンターにとっても自身の経験を生かしてメンティを支える意欲的な場を構築することができました。また、この取組をきっかけにメンターとメンティの間に日常的な関わりが生まれるようになりました。しかし、課題として、全教職員の参加や協働意識の向上を通して「チーム学校」の実現までは至っていない点が残されました。そこで、今年度は研究の成果等を生かし、若年教員の支援のために学校全体として当事者意識をもてる形で関与を促進できるよう日々努力しています。

川村 浩二さん「新しい環境での学びと貢献」 中部教育事務所



在学中は学校マネジメントコースでミドルリーダー育成を研究し、4月より中部教育事務所で指導主事を務めています。主な業務は、小学校教科担任制・組織力向上アドバイザー訪問、中学校組織力向上実践研究事業を中心に、教職大学院で培った知見を生かし、学校現場の組織力向上に貢献できるよう、学校現場の先生方と一緒に努めています。その他に、全国学力・学習状況調査、特別活動（キャリア教育）、人権教育、生徒指導、社会科・技術も担当しています。各事業で効果的な取組を見出し、県内への普及に努めています。教職大学院での学びと出会いに感謝し、日々知識を更新しています。

【授業実践コース】

田内 南央さん「日々、構想」 香南市立野市中学校



4月から在籍校に戻り、研究主任や生徒会、複式の情緒学級担任など、初めての役割に追われています。授業は1年生の2クラスのみですが、「考察・構想・表現する歴史学習」を続けています。また、大学院での研究をもとに、「探究」との接点を探りながら授業づくりを進めています。大学院では“自分のための研究”でしたが、今は“誰かとともに進める実践”へと変わりました。だからこそ、人を巻き込む難しさも、前に進む面白さも実感しています。研究と実践の両輪をまわしながら、現場でしか生まれない問いを形にする日々です。その営みこそが、今の私にとっての“構想”だと感じています。

樋口 桃子さん「異学年の児童が協働的に学び合える複式授業を目指して」 安芸市立赤野小学校



4月より在籍校にもどり、5・6年生の複式学級担任として授業づくりに取り組んでいます。教職大学院での学びを生かし、本校の教育目標「ともに学び、ともに育つ、赤野っ子」の実現に向けて、異学年の児童が協働的に学び合える単元構成をデザインしています。実践を通して授業内容の改善を重ねながら、児童の主体的な学びと相互理解を育む環境づくりを進めています。また、学校全体で複式学級の授業改善に取り組むため、研究主任として校内研を通じた研究推進にも取り組んでいます。今後も、現場での実践を通して得られる気づきをもとに、協働的な学びの在り方を研究していきます。

安田 直子さん「子どもが主体となる道徳の授業の実現に向けて」 高知市立潮江南小学校



2年間学んだ研究内容の実用化に向けて“子どもが主体となる道徳の授業”を現場に戻り模索しています。具体的には、討論課題を用いた話し合い活動の充実だけでなく、どの学年でも実践可能な役割演技の在り方、子どもの問題意識と道徳的価値がつながるような問いの持ち方など、よりよい方法を探っています。また、校外においては、日頃の道徳授業の悩みを気軽に話し合える道徳サークル活動を不定期に行っています。道徳に関心のある先生方と見識を深められるこのような機会を大切に、今後も道徳の授業の充実に努めます。

【特別支援教育コース】

井上 郁子さん「ユニバーサルデザインの視点に立った授業を目指して」 南国市立北陵中学校



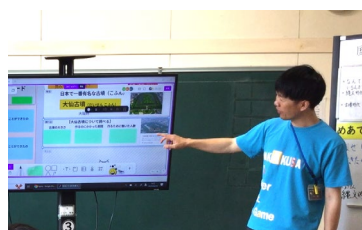
4月から新任校で、特別支援学級の担任と英語の教科指導で充実した日々を送っています。授業実践では、生徒の強みを生かした支援や指導の工夫を取り入れ、ユニバーサルデザインの授業を心がけています。時には思うようにいかないこともあります。様々な場面で、大学院での学びがつながり、自身を支えてくれていることを実感しています。今後も生徒の実態把握を丁寧に行い、強みを生かした授業で生徒の「できた！」をたくさん引き出していきたいと思っています。

小野 哲史さん「研究の視点を日々の支援に活かす」 高知県立中芸高等学校



現在は在籍校で通級・教育相談を担当し、大学院で学んだことを現場に還元すべく日々取り組んでいます。研究では、支援における“アセスメント→介入→評価→フィードバック”というサイクルの反復に取り組みました。学校現場に戻った今、こうしたプロセスは実際の通級指導や生徒支援において十分に生かせると実感しています。子どもたちの小さな変容に気づき、よりよい支援につなげていくために、これからも学び続けていきたいと思っています。

杉元 健太さん「児童生徒が主体的に学ぶ楽しさを感じられる授業実践を目指して」 高知県立若草特別支援学校子鹿園分校



4月に在籍校に戻り、肢体不自由を有する児童生徒と一緒に授業を行っています。大学院での実践研究を生かし、障害による困難さを補い、主体的で協働的な学習ができるよう、児童がICTを活用して学ぶ授業実践に取り組んでいます。また、知的障害を併せ有する児童の授業でも、アクセシビリティの機能を活用することで、ICTを使った学習機会を増やしています。これにより、これまででは一人では表現できなかったことも可能になり、児童の意欲的に取り組む姿勢につながっています。これからも、児童生徒が主体的に学習に取り組めるような実践を続けていきます。

山沖 智子さん「教職大学院での学びを現場へー特別支援教育推進の試みー」 高知県立佐川高等学校



今年4月から、在籍校に戻り、特別支援教育コーディネーターとして、特別支援教育に携わっています。今年度は「通常学級における合理的配慮充実事業」の担当者として、高等学校での合理的配慮の在り方について、校内支援体制の連携強化に取り組んでいます。

現在は、研究で実践した「10分会議」の問題解決モデルを活用しながら、生徒支援の方法について教員間で話し合いを進めています。教職大学院で学んだ理論と、現場での実践を繰り返しながら、これからも校内の支援体制の充実に向けて丁寧に取り組んでいきたいと考えています。

【在院生へのメッセージ】

学校マネジメントコースより・・・教職大学院で過ごした2年間は、先生方や多様な年齢・校種の仲間たちとの出会いを通じて、多角的な視点や考え方を学べた非常に有意義な時間でした。特に、皿鉢ゼミ発表の前にコースの垣根を越えて互いに発表し合い、知識や経験に基づいたアドバイスを交わした場面は、今でも鮮明に記憶に残っています。この2年間は、私の教職人生に深い学びと成長をもたらしてくれました。講義の課題に取り組み、協力して論文を読み解き、研究について真剣に語り合った日々は、年齢や校種の違いを超えて互いに刺激を与え合える貴重な関係を築くきっかけとなりました。そして、大学院の先生方は今もなお現場で悩む私たちに温かく寄り添い、助言をくださる頼もしい存在です。学校現場は現在、課題の多い厳しい状況にありますが、大学院で培った学びや研究の姿勢が、現場で働く先生方の支えとなるよう、そして在校生の皆さんが無事に修了を迎えられることを心から願っています。この2年間で皆さんにとっても実り多く、意味のある時間となるよう、先生方や仲間とのつながりを大切にしながら、自らの研究を丁寧に深めていってください。

授業実践コースより・・・教職大学院在学中には、先生方や異校種の仲間から多大な影響を受けました。視野が広がっただけでなく、物事を多面的・多角的に考える視点を教えていただきました。このことが、現在の自身の教師観や授業観を支えています。一番の変化は、「目の前の子どもたちの10年後に必要な力は何か」ということを考え、教科における系統性や単元ゴールを見据えるようになったことです。2年間を振り返ってみると、「自分の研究を深め、実践を積むこと」は本当に貴重なことだったと思います。なぜなら、皆さんが今得ているその知見が大学院卒業後に自分を語るために欠かすことのできない経験値となるからです。また、現場に戻ると実行しにくい「大学院の先生方や異校種の仲間ととことん話す」ことも大切にしてほしいです。今、自身の研究を深めることに悩む毎日は自らの血肉となっているのは間違いありません。皆さんの大学院生活がより実りあるものになることを願っています。

特別支援教育コースより・・・大学院では、特別な支援が必要な子どもたちのつまづきを捉えるためのアセスメントの方法や、認知特性に応じた支援をじっくり学べます。数ある支援方法の中から最も適切なものを選ぶには、根拠となるアセスメントが欠かせません。「主訴はどこか?」「原因は何か?」「原因の推定に必要な情報は?」こうした問いに向き合い、整理する力が現場で生きてきます。修了後は、校内の特別支援教育や生徒支援、通級指導教室などを担う方が多いと思います。現場はしばしば「走りながら考える」忙しさがあり、大学院での学びとのギャップを感じるかもしれません。しかし“見えること・できること”は確実に増えます。アセスメント結果から得られる情報も、修了後の方が深まっていると感じるでしょう。個別の指導計画も、より具体的に書けるようになっているはずです。支援が必要な子どもへのちょっとした声かけや手立ての引き出しが増えていることにも気付くと思います。1人でも多くの子どもに「できた」「わかった」「伸びた」を支えていけるよう、大学院での学びをぜひ大切にしてください。

Editorial note:

第VI期修了院生は、修了後もそれぞれの職場で、教育課題の解決に向けて取り組むとともに、自己研鑽を熱心に続けています。また、人間的にも成熟し、新たな課題と向き合いながら、さらなる精進しようとしている様子が伝わってきました。

修了院生の皆さんが、本教職大学院で学んだことを生かしながら、高知県の課題解決につながる教育実践を行い、その実践が他県の実践の範になることを願うとともに、個々人のさらなる成長を期待しています。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸
編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員
発行日：2025年10月17日
事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター
〒780 - 8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）
TEL 088-844-8457
E-mail ks33@kochi-u.ac.jp